

## 『防長風土注進案』に記載された薬草

五島淑子・小山修三\*

Botanic Medicine of 19th Century Yamaguchi

GOTO Yoshiko, KOYAMA Shuzo

(Received September 27, 2013)

キーワード：防長風土注進案 *Bōchō Fūdo Chūshin-an* 薬草 botanic medicine、  
山口県 Yamaguchi Prefecture、データベース Database、地理情報システム GIS

### はじめに

本報告は天保期長州藩の地誌『防長風土注進案』に記載された産物のうち薬草類をとりあげたものである。その目的は、記載された薬種のデータベースを作成し、GIS（地理情報システム）を使用して地図上に示すこと、データの統計処理も行うことにある。GISを活用することで、植生、地勢、道路、建造物などの多様な情報を重ね合わせた分析を行い、年代による変化等を明らかにすることが可能になる。著者らは『防長風土注進案』の産物・物産の記載を資料として、データベース化、GIS化し、分析することに取り組んでおり、本報告はそれらの作業についての中間報告である。

国や地域の歴史や経済について把握することは、行政の必須事で『風土記』をはじめ古くから行われてきた。政治や経済の転換期にあたる時期にはそれが多く、とくに幕末から明治にかけては各地方で多くの地誌がつくられている。筆者らは、岐阜県飛騨地方の『斐太後風土記』のデータベース化を行ったことがある（小山他 1982）。

『防長風土注進案』は、幕末の天保改革に関連して企てられた「国郡志」編修の地方資料として、藩内全域の町村から差し出させた明細書き出しである。藩府は天保12年正月、各宰判の代官役を通じて、各町村浦島に案書（編修項目）を示して実態調査の注進を命じた。地方においては庄屋が責任者となって調査した。藩府はこれをまとめて「風土注進案」と名付けた。内容は、長州藩の全領域11郡17宰判についての記載であり、本文395冊、古文書41冊に及ぶ。編纂の項目は大体において一致しているが、宰判によっては精粗の差がある（石川 1976）。

『防長風土注進案』に記載されている地域は、支藩（清末藩領、長府藩領、徳山藩領、岩国領）が除かれているため、山口県の約3分の2の地域である（図1）。資料として、山口県文書館が刊行したもの（山口県文書館 1960～1965）の複製版を使用した。

---

\* 国立民族学博物館名誉教授



## 1 薬草類について

### 記載された薬草

薬草の記載があるのは208村で、全体（326村）の63.8%を占めている。薬草の記載された村の分布を図2に示した<sup>注1)</sup>。『防長風土注進案』では、薬草、薬種、薬品等と記載されているが、薬草としてまとめた。

記載された薬草は347種である。但しこれらのうち誤字や地方名、書き癖などによって特定できないものがいくつかあり、それは除外した。薬草の大部分のものは和漢薬書や現在の日本薬局方でみとめられている生薬と一致する。将来はこのデータベースにおいて植物の和名（カタカナ）と生薬名（カタカナ、漢字）で検索できるようにしたいと考えている。

村の数で薬草類の頻度を調べると、最も多いのがスイカズラ（忍冬、金銀花）であり、ついでカラスビシャク（半夏）、マツホド（茯苓）、ハマスゲ（香附子）が、生産村の50%をこえている。クチナシ、クズ、モモ、アケビ、キキョウ、カヤ、シャクヤク、ジャノヒゲ、ヨモギ、オオバコ、モモがこれにつぐ（表1）。これらは私たちが薬草からイメージする深山幽谷ではなく、里山や畑にある身近な野草や栽培植物で量的にも潤沢なものであることが興味深い。また数の少ないものでも朝鮮御種人參のような高価で重要なものが含まれていることにも注目すべきであろう。

薬草は葉、花、茎、根、種子、仁など利用する部位によりそれぞれ効用がことなるがそれを一括して扱うことにした。また、植物のほかにはセミ、スズメバチ、アブ、ハンミョウ、カイコなどの昆虫やムカデ、ミミズ、ヒル。アカニシ、アワビ、カキ、タニシ、イカ、ウナギ、フナなどの魚介類、カモ、ハト、シカなどの鳥獣類に加え、凝水石、灰、食塩などもある。しかし、ここではデータとしては扱わないことにした。

薬草の薬効については、鎮痛、胃腸病、風邪、利尿、経血（婦人病）などの治療につかわれるが、複数の効能をうたうものも多く、全体としては滋養強壮、体に良いなど漠然としている。これが単一の効果をもつ現代の西洋医学の薬と異なる。しかし、トリカブトやバイケイソウをはじめ猛毒植物もあり高度で専門的な知識に裏打ちされていたことは明らかである。

薬草のうち、マツホド（茯苓）とハマスゲ（香附子）の記載がある村の分布を示した（図3、図4）。マツホド（茯苓）が県下全域で記載されているのに、ハマスゲ（香附子）は海岸沿いにあり、分布の違いが分かる。

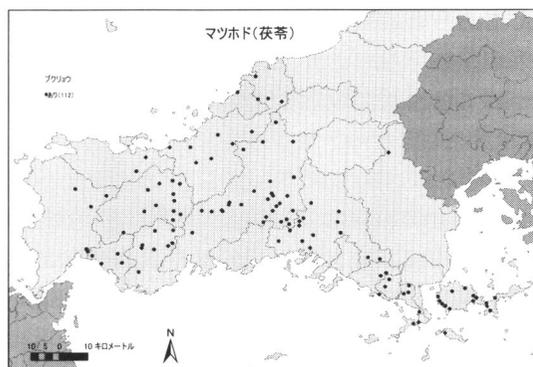
### 薬草の量の記載

量の記載のあるもの、あるいは金額での記載があるものの数は少ない。量的記載があるものは、羌活、蒼朮、細辛、桔梗、五倍子、獨活、半夏、茯苓であり、これらが売買されている品目であった（表2）。生産量または金額（代銀）の記述があったのは22村である。薬草ごとに量の記述がある場合が多いが、奥山代では数種をまとめて合計金額（代銀）で記載されている場合もある。宰判によって売買される品目に特徴があり、大島宰判平郡島と舟木宰判西須恵村の半夏、奥山代宰判は蒼朮、羌活、徳地宰判と前山代宰判は五倍子、美祢宰判は葛蕩、前大津宰判三隅村は茯苓、当島宰判は忍冬がある。

産量がほとんど記されていないことは、多くの村で「薬草はあるが売るほどではない」（たとえば上関宰判上田布施村「少々宛ノ義ニ付採薬賣拂世業ニ相成候程之義ハ無御座候」という記事にみられるように、薬草類が当時の経済流通網にはほとんどのっていないことを示しているようである。しかし、記載は多いが産量がない鳥獣魚類や作物や果実、用材などと同

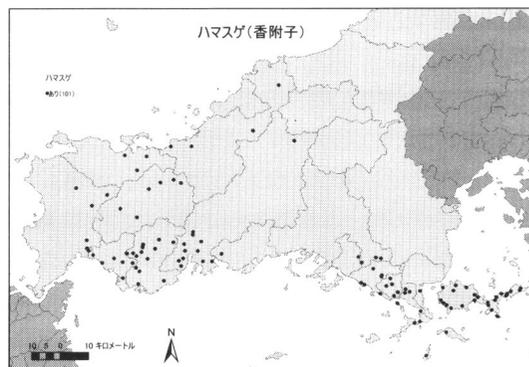
表1 『防長風土注進案』に記載された薬草の一覧（上位30位）

薬草名	防長風土注進案記載名	記載 村数	日本薬局方の生薬	延喜式 の記載
スイカズラ	忍冬 葱冬 葱苳 葱苳 忍冬花 金銀花	174	ニンドウ（忍冬）	
カラスビシャク	半夏	160	ハンゲ（半夏）	○
マツホド	茯苓 茯苓 伏苓	112	マツホド（茯苓）	○
ハマスゲ	香附子	101	コウブシ（香附子）	
クチナシ	山梔子	74	サンシシ（山梔子）	○
クズ	葛根 葛花 葛粉	73	カッコン（葛根）	○
モモ	桃仁 白桃花 桃膠 白桃皮 桃花	73	トウニン（桃仁）	○
アケビ	木通 通草	72	モクツウ（木通）	○
キキョウ	桔梗 桔梗 桔校 梗桔	72	キキョウ（桔梗根）	○
チガヤ	茅根 萱草 茅 茅根 白茅根	69	ポウコン（茅根）	
シャクヤク	芍薬 芍薬 赤芍 白芍 直芍薬	66	シャクヤク（芍薬）	○
ジャノヒゲ	麥門冬 麥門冬之類 麥門豆	65	バクモンドウ（麦門冬）	○
ヨモギ	艾葉 菱葉 蒿 艾	63	ガイヨウ（艾葉）	
オオバコ	車前子 車前 車前草 車輪菜 苺苳 苺苳	59	シャゼンシ（車前子） シャゼンソウ（車前草）	○
カワラヨモギ	茵陳 茵陳 茵陳 茵陳 茵陳蒿 茜陳 茵陳蒿	57	インチンコウ（茵陳蒿）	○
ナツメ	大棗 棗 太棗 木棗	51	タイソウ（大棗）	○
ウツボグサ	夏枯草 夏古草	48	カゴソウ（夏枯草）	
ウド	獨活 燭活	47	ドクカツ （ドクカツ 独活）	○
ウスバサイシン	細辛 細辛	44	サイシン（細辛）	○
クサスギカズラ	天門冬	39	テンモンドウ（天門冬）	○
サンショウ	山椒 蜀椒	39	サンショウ（山椒）	○
ベニバナ	紅花 紅藍花	39	コウカ （紅花 ベニバナ）	
ヤマノイモ	山藥 山藥 薯蕷	39	サンヤク（山藥）	○
シソ	紫蘇 蘇子 紫蘇子 蘇葉	38	ソヨウ（紫蘇葉、蘇葉）	○
イタドリ	虎杖 虎杖根	35		
カラスウリ	天花粉 天瓜粉 瓜萸仁 括樓 瓜樓 括萸 瓜呂根 瓜萸根 栝樓 栝樓 瓜呂 瓜萸根 栝萸根 瓜呂根 瓜呂仁 瓜萸仁 瓜萸仁 果羸	34	カロコン（栝樓根）	○
ヌルデ	五倍子 吾倍子 五位子	34		
ヤマゴボウ	商陸 山牛蒡	33		○
カラシナ	芥葉 白芥子 芥子 芥菜 芥采	32		
キョウカツ	羌活 羌活	32	キョウカツ（羌活）	
ホオノキ	厚朴 厚木 朴樹子	30	コウボク（厚朴）	○



(境界線は現在の市町界)

図3 マツホド(茯苓)の記載のある村  
(112村)



(境界線は現在の市町界)

図4 ハマスゲ(香附子)の記載のある村  
(101村)

表2 『防長風土注進案』に薬草の量的記載がある村

宰判	村名	薬草名	宰判	村名	薬草名
大島	平郡島	半夏 (5石 代銀500匁)	美禰	大田村	苘蕩 (4000斤)
奥山代	宇佐村	蒼朮、羌活、竹節、升麻、沙参、桔梗、細辛 (代銀 500匁)		岩永村	苘蕩 (8000斤)
				青景村	苘蕩 (6000斤)
	宇佐郷 大原村	蒼朮、羌活、舛麻、沙参、茯苓、桔梗、細辛 (代銀 200匁)	赤村	苘蕩 (3000斤)	
				伏苓 (500斤)	
			金粉草 (100斤)		
秋掛村	羌活 (700斤 代銀270匁) 蒼朮 (700斤 代銀280匁)	前大津	三隅村	茯苓 (50貫)	
波野村	蒼朮、細辛、桔梗 (代銀 200匁)	川上村	椿西分	忍冬 (代銀 13匁)	
須川村	羌活、蒼朮、桔梗、細辛 (代銀 (菜種を含む) 1貫)		忍冬 (代銀 50目) 茯苓 (代銀 50目) 細辛 (代銀 16匁1分3厘) ホカウエコン (代銀 100目) セッコツモツカウ (代銀 50目) ハナカ草 (代銀 60目) スイヤウバイ (代銀 100目)		
前山代	四馬神村	五倍子 (代銀 200匁分) 獨活 (代銀 150匁分)	当島	明木村	忍冬 (代銀 10匁)
徳地	串鯖河内村	五倍子 (20斤)			伏苓 (代銀 20目)
	馬神米光村	五倍子 (10斤)			五倍子 (代銀 20目)
	野谷村	五倍子 (43斤)			細辛 (代銀 50目)
	掘村	五倍子 (60斤)			紫根 (代銀 10匁)
	伊賀地村	五倍子 (30斤)		木通 (代銀 10匁)	
舟木	西須恵村	半夏 (代銀 500目)	半夏 (代銀 10匁)		
佐々並村	忍冬 (代銀 40目) 木通 (代銀 40目)				

じく日常生活レベルでは重要であったことは考えるべきかもしれない。

薬草が記載された村を宰判別に整理してみると村数と薬草の種類が非常に多いもの(大島、上関、前大津)、少ないもの(記載のない三田尻をはじめ奥山、先大津)がある(表3)。この差は何を意味するのだろうか。村数や薬草の種類が異常に多い地域では『防長風土注進案』の地域経済の把握と発展という主旨からみて、将来、有望な商品となりうる品目として期待したとみることができる。現に吉田宰判伊佐村では、薬種屋1軒、売薬師32軒と記載されており、

表3 宰判ごとにみた薬草の種類数

宰判	種類数
大島	254
奥山代	11
前山代	6
上関	152
熊毛	35
都濃	33
三田尻	0
徳地	50
山口	3
小郡	38
舟木	21
吉田	14
美禰	48
先大津	-
前大津	116
当島	59
奥阿武	67
全宰判	347

\*物産の中の薬草および薬種、薬品に分類されたもの（動物、虫、その他を含む）の数。

\*三田尻には薬草の記載はない。

\*先大津は薬草の分類がない。草にわずかに記述がある。

\*前大津の深河村、澁木村は草に分類されていたため除く。

### 本草綱目のインパクト

日本の薬草研究が庶民レベルまでの広がりをもよおしたのは江戸時代に入ってからである。とくに、李時珍の『本草綱目』を長崎で手に入れた林羅山が徳川家康に献上したことから本草学の実践的研究が盛んになり儒家や医者に大きな影響を与えたといわれている。日本産の薬種についての研究も進み、貝原益軒『大和本草』や小野欄山『本草綱目啓蒙』など多くの書が出版され大きな発展をみせた（伊藤恭子編 2012）。これによって、日本の医学（薬草研究）は中国、韓国とは異なる独自の道を歩み始めたといえるだろう。

この時代、山口県でも学校や薬草園がつくられるようになった。萩藩の御薬草園薬役をつとめ、享保の改革の一部として国内の薬用資源開発を実施した烏田智庵（1689～1768）、諸国で薬草を採集し、岩国領内の薬草調査した飯田道珊（1690～1751）、鑄銭司村に薬草園を私設した松永周甫（1816～1885）をはじめ多くの学者が輩出している（山口県薬剤師会編集委員会 2003）。

売薬業が盛んであった。貨幣経済が浸透する時代の流れのなかで薬草が産業としてどんな意味（価値）をもっていたのかについては今後の検討が必要であろう。

## 2 薬草の歴史

### 延喜式

山口県の薬草に関する最も古い記録は『延喜式』にある（黒板他 1965）。典薬寮の記載のなかに「諸国進年料雑薬」があり、山口県では周防19種、長門13種、重複を除くと計24種ある。薬種は全国的にみて特殊なものはない。また表1に示すように、『防長風土注進案』で記載された薬草は典薬寮記載の薬種の粋に収まっており、これが日本医療の礎であったことがわかるのである。

典薬寮は日本が律令制（701）をはじめた時に正式におかれ、2世紀に中国で編まれた『神農本草経』に基づいて国家公認の薬を定めたと考えられている。そして、それは時代とともに増補改定されていった。当初は『本草経集注』、奈良時代末には『新修本草』が使われたとされている。一方、記載された外国産品に対する日本産の種または類似の効果を持つ薬種、および対応する植物の和名研究が盛んに進められていたことは『本草和名』（918）や『和名類聚抄』（931～8）などがあることから分かる。医学（薬草）研究は日進月歩といえるほどに盛んであったのである。

薬草は単一ではなく、散、丸、膏という形で数種を合わせる処方を行っている。しかし、当時、これらの薬が利用されたのは宮廷や寺院、官衙（役所）などにほぼ限られていたようで、山口県でもそうだったはずである。

### 売薬産業と売薬の経済性

こういった流れの上におこったのが売薬産業である。とくに、享保の改革は商品としての薬草に注目したためにブームの原因になったようだ。売薬はすでに、鎌倉末から記録が見えはじめ、修験道の行者が活躍したといわれている。本格的に盛んになったのは町人が台頭した元禄時代からであった。興味深いのは富山や奈良の売薬は置き薬（行商）という特殊な販売方法で辺鄙な農村地帯にまで伝わり、全国的に浸透していったことである。同じやり方は、各地で取り入れられているが、山口県でも長門の伊佐徳定村では伊佐売薬業者がすでに延享2年（1717）には17軒あったと記録にある（伊佐の売薬道具調査研究会 1993）。

山口県の売薬業は全国的にみると規模は小さかった。時代は遅れるが明治7年（1874）の統計では1万円以上の薬草類の生産府県として大阪、富山、島根、京都、福島、石川、奈良、長野、栃木、伊勢、堺の11府県があげられているが、山口県は含まれていない（明治文献資料刊行会 1959）<sup>注2)</sup>。

上記の伊佐徳定村では薬は自家で調合し、原料の多くは大阪や隣国の石見から買い付けたとあるように、地元でのしっかりした生産体制はできていなかったようである。ただし、販売に関しては独自の行商ネットワークが確立しており、経済価値は高かったと思われる。

文書に薬屋が村の世話役をつとめたとあることからみて酒や味噌製造と同じくミクロな地方経済の中心となりえたと考えるべきだろう。薬価についてはまだ調査が及んでいないが、たとえば明治7年の奈良県ではクマノイ（熊胆＝斤あたり20円）が特に高価で、クチナシ（山梔子＝6.8円）、ニンジン（人参＝3円）がこれについている（明治文献資料刊行会 1959）。そして、ベニバナ、ブクリョウなどの一般的な薬草については5～20銭となっており、大部分が野生であった薬草の採集は、農家が季節外の兼業としておこなう場合そう悪い仕事ではなかっただろう。

### 3 くすりの位置

今日の日本は医療の保険や制度が整い、病気になれば病院に行き、必要ならば処方箋に従って薬をもらうことが普通になった。しかし、庶民の生活はもっと多様で混沌としていたことを民俗学の記録が描きだしている。民俗学は地域に密着しその地の特異な習慣や行事を取り上げるものだが、聞き取りは古老の話が中心であることもあって、現代化以前の社会の様子を生き生きと知らせてくれる。

山口県の民間医療については、松岡利夫氏をはじめとする多くの報告がある（松岡利夫 1977）。民間療法は、精神的（祈願、祈祷、呪い）なものと、薬とに分けられるが、民俗誌をみるかぎり精神的なものが主流であったようだ。それは治療行為がもともと魔術や呪いと深くかかわっているからである（現代でも精神的な意味は無視できないという）。今日でも神社仏閣を中心としたその種の行為が盛んであることの意味を考えさせる。

それでは薬はどんな役割を果たしたのだろうか。

民間薬については、8世紀に典薬寮で定められた漢方の薬種が中心ではあったが、それにくからの民間薬、センブリ、ゲンノショウコ、ドクダミをはじめとする日本の薬種も大きな位置を占めていた。常識的に考えがたいもの（ナメクジ、キンギョ、モグラの丸焼き）が薬に使われていたことに驚く。生死にかかわる病や治療に対する庶民の切実な思いが伝わってきて感銘を受けるほどである。

薬草の使われ方をみると、腹痛、下痢、発熱、咳、利尿、打ち身、切り傷、皮膚病、虫ささ

れ、かぶれ、湿疹、ひび、あかぎれ、イボ、ウオノメなど日常起こるあらゆる愁訴に直接対応するトンプク的なものが多い。これらに対し1000年以上にわたって用いられてきた和漢薬が効果を発揮したことは否定できない。また、神経痛、リュウマチ、腎臓病、肺結核、肋膜炎など慢性病に対して長期的対応の効用もある程度までは認めるべきだろう。しかし、とくに注目すべきは小児および婦人病にかかわるものである。

五島（藤野）は明治初期の飛騨の人々の栄養状態の特徴として、供給栄養量が全体的にやや少なめであり、特にカルシウム、ビタミンA、C、動物性たんぱく質が不足、鉄とビタミンB<sub>2</sub>がやや不足、一方食塩が過剰であることを指摘した。病気との関連では、大きく4つ取り上げて、第1の乳幼児の死亡率の高さに関して、たんぱく質、無機質、ビタミンの不足や、乳幼児期の栄養、離乳食が適切でないこと、第2の産後死・難産死、妊産婦・授乳婦の栄養状態の不良が影響していること、第3の中風は塩分の過剰摂取、そして第4の伝染病は、近代医学以前の日本の社会の衛生的環境の悪さとともに、感染症に対する抵抗を高めるための動物性たんぱく質やビタミンAなどの不足にも原因があるのではないかと考察した（藤野 1983）。

江戸時代までは妊産婦や幼児の死亡率が非常に高かった。産後の肥立ちが悪い、母乳が出ないなど女性の健康保持は、人々にとっては大きな関心事であったはずである。その主な原因の1つは栄養の偏りと乏しさだった。それを補うために薬草が盛んに利用されていた。それは、今日のサプリメント・ブームへとつながっているのではないだろうか。

## 謝辞

藤本蓮風氏（一般社団法人北辰会）、浅見潤氏（三光丸クスリ資料館）には、薬草について、土屋貞夫氏（元美祢市立図書館館長）には、伊佐の売薬について貴重な助言をいただいた。本稿は、科学研究費補助金「地理情報システムを活用した食文化研究の構築」（研究課題番号：23500928、五島淑子）の助成による研究成果の一部である。

## 注

- 注1) 『防長風土注進案』記載された村には、複数の村があわせて記載されている場合や、浦もあわせて記載される場合がある。データベースを作成するにあたり、それらのまとまりごとに1村扱いとした。その結果、村数は326村である。
- 注2) 明治7年府県物産表において、山口県は「薬種並製薬類附生乾」に蜂蜜5,000貫（1250円）、桂1,000斤（1,000円）、桂油550瓶（55円）、蜜蠟4,000貫（400円）、計2,705円と記載されている。（明治文献資料刊行会 1959：687）

## 文献

- 石川卓美編 1976 『山口県近世史研究要覧』マツノ書店、緒言 1-5
- 伊佐の売薬道具調査研究会 1993 『伊佐の売薬道具』美祢市郷土文化研究会
- 伊藤恭子編 2012 『江戸のくすりハンター小野蘭山』内藤記念くすり博物館
- 黒板勝美、国史大系編集会編 1965 『国史大系26 延暦交代式、貞観交代式、延喜交代式 弘仁式 延喜式』吉川弘文館
- 小山修三・松山利夫・秋道智彌・藤野淑子・杉田繁治 1982 「『斐太後風土記』による食糧資源の計量的研究」『国立民族学博物館研究報告』6(3)、363-598
- 藤野淑子 1983 「明治初期における山村の食事と栄養—『斐太後風土記』の分析を通じて—」

- 『国立民族学博物館研究報告』7(3)、632-654  
明治文献資料刊行会 1959 「明治七年府県物産表」『明治前期産業発達史資料第1集』明治文献資料刊行会  
松岡利夫 1977 「山口県の民間療法」坂田ほか『中国・四国の民間療法』明玄書房、97-140  
山口県文書館 1960～1965 『防長風土注進案』全21巻 山口県立山口図書館（復刻 マツノ書店 1983）  
山口県薬剤師会編集委員会 2003 『やまぐちの薬草』山口薬剤師会